

趣旨説明

一般社団法人 J A 共済総合研究所
調査研究部 主席 研究員 川井 真

J A 共済総研セミナーでは、ここ数年、人口減少をとまなう本格的な高齢社会の到来を見据えて、持続可能な社会の姿を探索してまいりました。当初は、地域再生や防災対策における先進的な取り組みや、医療・介護政策の今後の動向など、個別具体的なテーマに絞り込み、それぞれの分野でご活躍されている学識経験者をお招きして最新の知見や活動の成果を発表していただくことが主たる目的でした。したがって講演会形式で開催してまいりました。

しかし昨年度からは、J A 共済総合研究所が実施する調査研究の成果を広く一般に公開するための場として、セミナーのスタイルを一新しました。当研究所の主要な研究活動のひとつに

地域社会づくり（食・自然エネルギー・ケアにつながる新たな生活基盤の可能性を探る）と題して、三河中山間地域で展開する——地域住民同士の相互扶助を駆動させる普遍的な原理を探る、という社会学的テーマも内包した——地域研究の概要を報告させていただきました。そして後半は、来場者にも参加していただき、会場を巻き込んだディスカッションを行いました。^{*}すると全体を通して、いくつかの課題が見えてきたのです。そのひとつが、本日のテーマになっている健康で活力ある高齢社会の実現と、医療・介護・福祉の安定的かつ効果的な提供に向けた社会基盤の構築、とりわけ地域包括ケアという新たな概念を反映した地域社会づくりでした。この問題については、もうすこし議論を積み重ねていく必要があるとの判断から、今年度のセミナーに引き継ぐことにしたのです。そこで本日も登壇いただくのは、昨年度と同

「永続的な地域社会づくり」があります。アクションリサーチを実践する地域研究ですが、この実証主義的な地域研究と関係の深い共同研究者の方々にご登壇いただき、前半で個別報告を、そしてセミナーの後半には、来場された皆様にも参加していただくことのできるオープン・ディスカッションの時間を設けることにいたしました。これにより会場が一体となって、有意義で建設的な意見——もちろん異論や反論も含めて——を交わすことのできる場が創造されるのではないかと考えたからです。それはまた、理論のみならず実践をとめない、つねに結果が求められるアクションリサーチという研究を、より深化させていくことにもなると期待したからにはほかなりません。

したがって今年度のセミナーも昨年度と同様の構成で進めさせていただきます。昨年度のセミナーでは「自然と人間の協働による永続的な様、当研究所の研究活動を陰になり日向になり支えてくださっている先生方であり、とくに社会保障と地域経済、そして地域包括ケアというテーマで議論を深めるには、余人をもって代えがたい日本の第一人者です。

まず西村周三先生ですが、西村先生との出会いは、いまから約20年前に遡ります。その頃の私は日本の人口構造の変化と国民医療費の推移を分析していたのですが、既存の診療報酬制度による費用償還システムでは、医療制度および医療保険制度を安定的に維持していくことが困難になる時期が必ず到来すると考えていました。また医学・医療の進歩と医療経済の健全性を担保するうえにおいても、レポートに記載される病名とは別に、世界保健機関（WHO）が発行する国際疾病分類（ICD）を用いてデータを収集することがベターではないかと感じていました。いずれにしても診療（臨床）データ

ベースの構築が不可欠になってくるのではないかと、という駆け出し研究者が抱える問題意識について、失礼かつ無謀にも、西村先生にご意見を伺ったのでした。畏れ多くも西村先生は貴重な時間を割いて真剣に対応してくださり、その明快なご意見に、視界を遮っていたモヤモヤとした霧が一瞬で晴れていくような清々しい気持ちに包まれたことを、そして西村先生の深い見識と洞察力の鋭さに圧倒されたことを、いまもはつきりと憶えています。

そして辻哲夫先生ですが、辻先生との出会いもすでに10年以上前のことになりました。当時は厚生労働審議官でいらしたと思いますが、研究会の席で辻先生のお話を聞く機会がありました。そのときの感動はいまも鮮明に残っていて、中央省庁に対する根柢のない不信感のようなものが、すべて払拭されていきました。「未来が其の胸中に在れば」^{(*)1}、立場や役職に囚われること

もあり、すでに10年以上にわたり研究に関するご指導をいただいております。また共同研究や研究会の運営、大学等における講義・講演など、これまでも幅広い活動を一緒に進めてまいりました。真野先生は、大学院教授、臨床医、医学博士、経済学博士、そしてMBAという多彩な横顔をお持ちですので、学際的で多角的な議論の進行役をお願いした次第です。

医療と介護、そして高齢者福祉については、社会保障および医療制度改革の行方や、保険償還額の改定など、国家の制度改革による影響を無視することができず、住民努力の限界を突きつけられることの多い分野でもあります。この限界を超えて、地域が求める知的要請に応えるために、今年は「2025年の日本を俯瞰した調和的な社会経済モデルを探る」これからの10年、地域の高齢化問題にいかに向き合っていくか」というテーマを掲げました。高齢社会に

なく協働できる、という確信を抱いた瞬間でした。辻先生には2009（平成21）年度のJA共済総研セミナーにもご登壇いただき、「ジェロントロジー（老年学）と地域社会」というテーマで講演をしていただきました^{(*)2}。

それから早川富博先生は、私が個人的に最も尊敬し、信頼しているパートナーであり、心豊かな社会への変革を目指す同志でもあります。早川先生には昨年度のセミナーに引き続き、今年度もご登壇いただきました。三河中山間地域におけるプロジェクトの拠点であるJA愛知厚生連足助病院の院長として、過疎地域の実情をお伝えいただき、その現実を受け止めたいうえで、農山漁村における地域包括ケアのあり方を検討してまいりたいと思います。

そして最後に真野俊樹先生ですが、今回のセミナーでは共同司会とコメンテーターをお願いしました。真野先生は当研究所の客員研究員で

おける地域経済の課題とイノベーションの可能性、地域資源の乏しい農山漁村における地域包括ケアの考え方などについて、オープンなディスカッションにより議論を深めてまいりたいと思います。

(*)1 2014（平成26）年3月12日開催。詳細は講演録「平成25年度JA共済総研セミナー公開研究会 自然と人間の協働による永続的な地域社会づくり」食・自然エネルギー・ケアでつながる新たな生活基盤の可能性を探る」（2014年10月発行）、当研究所ウェブサイト^{(*)2}を参照。
(*)2 高知の思想家である植木枝盛の言葉で、「未来が其の胸中に在る者之を青年と云ふ」から引用。
(*)3 2010（平成22）年3月12日開催。「共済総合研究」Vol.60（2010年11月発行）に講演録を掲載。当研究所ウェブサイトを参照。